

久留米大学 バイオ統計センター 公開セミナー

対面形式
&
WEB(LIVE)
配信

門脇 ゆう子 (久留米大学大学院医学研究科博士課程4年)

「小児期における頭部CT検査関連の脳/中枢神経系がん生涯リスク予測」

コンピュータ断層撮影(CT)は現代医療に利益をもたらす一方、成人より放射線感受性が高いと言われる小児で、CT検査関連のがんリスク増加の懸念がある。海外の疫学研究では、小児CT関連の脳/中枢神経系(CNS)がんのリスク報告があるものの、日本からの報告は限られている。本研究は、日本のCT検査関連状況の最新知見情報と放射線リスクモデルに基づき、小児の頭部CT検査に関連した脳/CNSがんの生涯リスク推定を試みた。2018年は0~10歳で頭部CT検査が138,532件実施され、その後の生涯でこの検査に関連した脳/CNSがんの過剰症例は22例と予測された。本研究は日本人小児のCT検査関連の生涯リスクを評価した初の研究であり、CTの利益とリスクを正当化するための定量的エビデンスとして意義があると考えられる。

2021年1月26日(火) 18:00~19:30

久留米大学バイオ統計センター【コンピュータ室】

福岡県久留米市旭町67番地

羽田野 義郎 (久留米大学大学院医学研究科博士課程4年)

「感染症専門医による全例フォローアップの有無による

黄色ブドウ球菌菌血症の30日死亡率、バンドル施行率の検討」

黄色ブドウ球菌性菌血症(SAB)はcommonかつ死亡率が高い感染症である。日本の大多数の病院で感染症医は不在、または少数であり、少ないマンパワーで最大限の治療効果を得る必要がある。感染症医が少数の急性期病院で、SAB患者を全例感染症医がフォローすることで、30日死亡率、バンドル遵守率の変化を明らかにした。2015年4月~2018年3月、18歳以上のSAB患者を対象とし、介入開始前、介入開始後にわけ、介入開始後にはSAB診断時点で感染症医がバンドル内容を電子カルテに記載、連絡をし、全例フォローアップを行った。主要評価項目は30日死亡率、副次評価項目はバンドル遵守率とし、一般化構造方程式モデルを用いて、30日死亡率へのリスク因子を推定した。114例が解析対象となり、30日死亡率は介入開始後低下した(17.3% vs 4.8%, $p=0.02$)。年齢、バンドル施行数、Pitt bacteremia score ≥ 3 は30日死亡率の有意な危険因子であった。バンドル遵守率は介入後に全項目で上昇した。リソースの少ない状況下でも実現可能であり、医療の質の向上に寄与する可能性が示唆された。

申込方法 対面形式へのお申込み不要。

WEB配信申込方法: 下記メールアドレスへ、件名「1/26公開セミナー受講希望」、メール内容に氏名、所属、職名をご記入の上、前日までにお申し込みください。

お申込みメール返信でWEB配信URLをお送りします。

※配信はZOOMで行います。入室の際ZOOM表示名はお申込み氏名(漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字)と同一にしてください。お申込み者と確認できない場合、受講をご遠慮いただきます。

WEB配信お申込み
お問い合わせ

久留米大学バイオ統計センター公開セミナー係
✉ biostat_seminar@med.kurume-u.ac.jp